千の手



継鹿尾山　寂光院
山主　松平實胤（まつだいらじついん）

先日、詩人・坂村真民師の「手が欲しい」（本紙（3）参照）、「手となろう」（『朴』所収）という詩に出会うことが出来た。

盲目の子が描いたお母さんという絵には、二十六本もの手がかいてあったそうだが、それをご覧になって師は、千手観音さまの実在を確信されたという。

母の絵を描けと言われれば上手、下手は別として、それなりの顔形をかくことは出来る。しかし、生まれてこのかた、盲目の子にとって、母の存在は顔形ではなく、自分に尽くしてくれるその手のぬくもりであったようだ。

二本の手ではできない事だ

それを描いた子供の心を私はうかがい知ることは出来ないが、恐らくこのように考えたに違いない。

お母さんはね、朝起きればパジャマを着替えさせてくれるよ。朝ごはんも作ってくれる。学校にも送り届けてくれるよ。学校が終わるころには必ず迎えにも来てくれるんだ。家へ帰れば勉強もみてくれるし、おいしい夕ごはんも作ってくれるね。お風呂にも一緒に入ってくれるし、夜は面白い話を聞かせて床にもついてくれるんだ。僕はまだ自分で何一つ十分なことは出来ないが、お母さんが手助けしてくれるので僕は元気に学校に行くことが出来る。僕には二本しか手がないが、お母さんが僕にしてくれることだけを考えても、とても二本の手ではしきれそうにないんだよ——と。

私は千手観音さまを本尊としてお仕え申し上げて既に十三年になる。そのお姿に身近に接していながら私は今まで何を思い、何を願って合掌して来たのであろうか。何を学んで来たというのであろうか。

京都、奈良の寺院を訪ねる外国人は多い。美しい仏さまには感嘆の声をあげるというが、しかし、千手観音さまは、そのお姿のゆえにあまり好評を得ないと聞いた。

グロテスクと思う外国人

当山を訪ねる外国人も、決まって「どうしてこんなにたくさんの手があるんだ？グロテスクだ」と聞く。

私の方も決まって「このようなたくさんの手、たくさんの目で私たちを常に見守り、支えてくださっているのですよ」と答えてきた。当然、自分もそのように信じてきたし、それは今でも変わらない。しかし、千手観音さまがそのお姿から更に重要なことを教えて下さっているのに、私は今まで気づかなかった。

私たちが幸福な時、千手観音さまの御前に座れば何を語りかけてくださるだろうか。

——お前は今の幸せを、自分で築いたと思ってはいないか。今の地位を築いたのは、自分の実力のなせるわざと思ってはいないか。私の姿を仰ぎ見ろ。お前の今の幸せは、このようなたくさんの人々のお手助け、たくさんの人々の温かいまなざし、まさに限りない”おかげさま“をいただいて築かれたものなんだよ。今こそ謙虚に感謝の心をもって受けとめよ——。

救いのシンボル